左衛子

あけぼのゝかあいと啼いた初
がらすつねきく時たにくなり
てぬーのたよりか春風ごそ
よとれんぐに通ふかり香り
ゝぱつとふりむけばエヽよく
らーい床の梅笑ふてゐるぢ

左衛子

やないのいな

秋の狐と六狐の月の芒さを
て探て待つしやのい山々も浪
ゝ照り添ふ新清く定めこのね
たる釣りの船雨ゝ添るゝぐ
やないのいな

二上り
明日はお立ちのお名殘りお
〳〵や若〳〵も道中で雨など
降らば悪い〳〵ゆう思ふた涙
雨隨分御無事で道中堅固
よ行こう〳〵やんせさあまいらんせ
三下り
櫂見よとて名を附けてま

づ胴櫂多ぜこらよい狂櫂と間
夫は志れよかー〳〵ヨヽどうな
と首尾〳〵て逢はー〳〵やんせ
何時ぢや引けすぎぢやた
そやあんどんちらりほらり
と重棒ひく

本調子

五月雨よ池のまこもに水ま
〜ていづれゞあやめのきつば
たさだのよそれと吉原へは
ど遠こうらぬ水神の離れざ〜
きの夕晴よちよつと見合す
冨士筑波

三下り

鶯かい〜て清き流れよと
ぶはたる清えつのぼりつ長
良川さだのよそれとかゞり
火の水よてりそふ金花山は
なれ〜の名でさへあゆよ
こゞれて狐を明す

左調子

咲いた樣よなぜ駒つなぐお
ほべらぼなお心なしそこでもつ
て駒がいさめばそんれわえ
花ゞ散る

左調子

小狗更けてねまきこのまゝ
のうたゝ寝よぞつと身よ去

む悪風ゞゞエゝよくらしい明
の鐘

左調子

里を離れし草の家よ二人
の外は虫の聲すきもる風
にともしゝ大の消えて嬉しき
窓の月

三下り
あまりつらさよ出て山見れ
ば雲のかくらぬ峰はなし
三下り
酒と女は氣の薬さ兎角浮
世は色とさけサヽ　ちよつぴ
りつまんだ悪えんいんねん
ナマイダ〳〵　ぢごくごくらく

〳〵ずつとりくのも二人連れわ
〳〵が欲目ぢやなけれども
おまへのやうな美〳〵い女子と
ぢごくへ行つたならばゑんま
さんでもお地蔵さんでもま
だ〳〵鬼こそろ〳〵

三下り

五月雨の空よ一聲ほとゝぎ
す晴れてこゝ出す木母寺の
せきや離れて綾瀬ゝ
の森を横よ見て越ゆるまも
なく堀切の菖蒲やゝ五尺のあ
やめ草

女調子

咲くの〳〵と待ちわびてつい
庭先の梅の花かをりはよ
い〳〵よいやくさ

三下り

さをさせぬ船は思ひの岸よつ
くおもかぢとりかぢ手くだは
すれどなぜよ逢のぬ我思ひ

左調子

西行さん始めてあづまへく
だる時すゝのころもよ井の
つゐとうなす程のたゝき鐘
ちきちやんちきちきゝ

三下り

なむまいだ
さぎこを烏と云ふたゞ毋理

か葵の花も赤う咲くいち羽
の鳥も二わとりと重と云ふ
字を里で書く

二上り

薩摩さこりやサ薩摩といそ
いでおせば汐がさコリヤサそこ
りで稽ゞ立たぬ

三下り

咲いたさくらの木よコリヤ〜
駒のたづなをほどけぬやうに
〜つかと結び附け駒ごかぶ
り振りやる美るもよ咲いた櫻の
花ゞ散る美事よ咲いた櫻
の花散る美事よ咲いた

櫻の花ゞ散る美事よ咲いた
櫻の花ゞ散る

三下り

さなきだよ重きゞ上の小紋衣
ほんよ顔世は貞女のものよゞ
まんなされやゝ皆谷殿さうさ
登城もおそいはず

左調子

さゝのきげんでつい浮氣よ
なりま〳〵たひいたゐもとに
梅かをる云はねど先はそん
ぢよそれ花まうらみがある
わいな

左調子

咲くやこの花ほとゝぎす一と
聲啼いてきこのまほ〳〵なん
の居るやらねないやらゝれど
うぢやいな〳〵あのなァァ
どうぢやいな

二上り

切れて見なされたゞおくも
のこのわらの人形よ五すくぎ

左調子

掬てもやさ〳〵や雷どのはご
ろり〳〵ごろ〳〵仲さん
な髪を〳〵やるげなをこの〳〵
太鼓腹よひっつけて虎の皮の
頭ゑむりおよゆ着ぶらさ
げて雲のあたひのらながぶ首

出〳〵下をのぞいて恥この〳〵さ
うよ文はやりた〳〵鹿脚は居
らず稲妻どのを使ひよて
お子代さま参る雷よりと
云へば娘はびつくり〳〵そを
かくて内よ入る

三下り
さくら〳〵と浮れていつか
通ひくるわよ袴はれて花も
実もあるあげ巻ごおもひ
染めたるうちかけよかくす
男のすそ模様

三下り
十布のすがごも七布の上よ君
を様させて此身を三布よ様
てもさめても忘られぬ

三下り
きやらの香りとあの君様は
いくそ泊めても私〳〵やとめ
あこのぬ様てもさめても忘
られぬ

左調子
来てはくだた巻くふすぐめ
さへもさくの上なら見非ぐの
ない ションガイナ

左調子
君がおふせを初言よきい
ていともかーこき学の小枝
よちよつとうつり氣なこち

の心をそよくとそらふく風
がよくらくいい

二上り
雪はーんくく狐も更けわ
たるどうせこまいとまん中へ
一人ころりとひぢまくら仍ど
きぢやあく様へられぬ

左調子

指を切らせてまだまもない
よまで切れとはどうよくな

左調子

雲を待ちあられをしのぐ
逢ふ狂さはかへさるやならぬ
首尾となりあと一人寝のね
やの内あたりよ残る面影

六下り

はたもと吋什の吉ばこのり
夢よなと告げても欲しき
我が思ひ乱れ心のいと狂さを
ねむねぬまたに口ずさみ口も
とまねて勢まねて一人ぼっ
えむねやのうち

左調子
往きよ奇らうかのへりにゝ
よかならばゆきまもかへりよ
も ションガイナ

左調子
行こうか戻らうか戻らう
かりうかアゝまゝよ女房の
つのもはゝ次第こゝらが世よ

左調子
云ふなのんづく虫のせいうら
傘ぎうでもおすゑなさい
重のあゝたの朝ぼらけ浪花
の浦の真帆片帆往き来の
舟でたよりする私ゝやかう
ゝて居るわいな

左調子

夕立やさつとふき来るねやの戸よぴの〳〵おほこわのみ

なりさんはゝわけれど私ーがためよは出雲よりむすんだ

孫の坂やの内よくや晴れ行

〳〵夏の月

三下り

夢の手まくらついぬ明けて別れたばこの思ひの煙り

おもふお方へなびき寄る

左調子

指先きで百姓石や稲の花

今朝の寄付なんとしよう

エゝもぢれつたい此の天氣

左調子

めぐる日の春よ近いとて老
木の梅も若やぎて低〳〵を
ら〳〵いや〳〵香り床〳〵と待
ちわび兼てさく〳〵啼き渡る雲
のきては胡蝶を起し〳〵けり
さりとは氣みじかな今年し

めて行くわいなほうほけきよ
うと云ふ人さんぢや

三下り

目見へ染〳〵はきのふけふつき
ぬ孫とてまた逢ふ狐半の
云ひたいことも山〳〵ぶきの
云はぬ色なる身のつらさ

目よ青葉山よ里塚のうす
暑り催す雨よほとゝきす高
く呼びてはつゞつは

左調子

三浦三崎の旅屋の下女ゴ雨
も降らぬよ傘さゝたとさ
傘さゝたとさ

二上り

羽織帳紅閨よまくらならべて
給ひのふ姫のくちからやいのとは
うまいものぢやと思ふちァゝ
夢ゝの様あせびつゝより吹の鐘
おまへを待ちく故やの内
七つの鐘のなるまでも

三つの車よ法の道かたくの
門やいでぬらんそら出たいき
りやうなんぞはおほゝわや
身のうきよ人のうらみはな
んのその私しのうらみはこ
わいぞくなぞとみやすぢの

おつうすまゝてお能ごゝり
でおつゝやいまゝたときのう
まくさんまんだばさらんだ
でやんれ身をこゝたと
さゝりん氣と浮氣は罪
なもの

左調子

皆こてよ三つのうろことゑも
高時ぞ浮れ天狗のさか盛り
にぎをんどうふのでんがく舞
はさすが日本よたぐひなき

二上り

都ではやるおき上れこぼ〜
よい殿見れぞついころ〳〵〳〵

とがつてんかごつてんかごつて
んまて俗

三下り

三浦屋の高尾大夫ぢや
なけれどもえみぢ葉の青
葉にしげる夏木立我れは親
腹こらの芸者ぢやないよ

左伺子
水ので花と二人の仲をせのれ
て逢はれぬ身のいんごのたとへ
どなたの意見でも思ひ切
る氣は更よない

左伺子
都離れて汽車の窓一人さび
〳〵もの案じ涙をかく〳〵

左伺子
お茶一つ頂戴な
人よ知られてもう百年目私〳〵
やおそよほれ申すいやならい
やと申すべく〳〵どきやう定め
てせよやならぬお前も正氣
でいやさんせおそよおさつし

左調子
都離れて主さんといきなふ
嗅も水調子女つた男つたの仲
もよくいつ〜か更けて鐘ゴヤ
も濡れて姿〜き窓の月
左調子
人よ意見をした私〜が今
では我身がはづかし〜い思案の

外とはこの事か
左調子
敏ふく逢ふのは互ひの毒と承
知〜なぐら逢ひたうてどう
〜ても逢はずよや居られな
いそんなよ逢ひたぐつちや
あきれこのくるわね

本調子

初手よほれたと私しが悪いよ
だ〜去たのはぬしが負け

本調子

明ごらす時次郎が塀のそと
もにたゝずみてかむろ美どり
の泣く琴よ塀をとびこへ浦
里の縄をとくやらいだきしめ

かむろ美どりをだきかゝえ
ともよのごるこへいの外

三下り

人とちぎるなら落くちぎ
りて末までとげよ紅葉ばを
見ようすきごの散るかゝきが
まづ散るものよて候

東調子

一人孫のさびしーさまあんどん
引きよせ飲む煙草まくら
よあてー文のはーかへすぐも
深酒と浮氣心の出ぬようにか
いたるぬーはよそのその花それよ
まようたごの馬孫らーい

三下り

時雨ーて待つ身はつらきつ
たもみぢおとなふものも軒の
雨ーめり勝ちなる床の花

東調子

嶋田金谷の旅屋の下女がな
ますもるとて ちよこ出ーた
とさァ、ちよこ出ーたとき

左調子

藥師さま西縁日道の中ばよ
立ちとぎり右や左のおだんな
様方やごもんようやおなさけ
と手を合せおを元はちめん
どうさまなごら目くらを助
けてくだされや

左調子

浦里を〳〵庭の古木よくく
り附け折り〳〵も降りくる雪
ふぐきほうきおつ取りうつ吉
よ禿みどりが取りついて旦那
さんゆかんよんあそばせとす
がる禿もとも〳〵ばり

左調子

東雲よつたぐかからんだ柳の枝
にサット一ト降り悪くらいぢ
やまなあらしがなけりやよい

左調子

志賀の唐崎の一つ松狂毎〳〵
にとまりがらすぐむれ来るわ
あほ〳〵と嬉し涙のこのわくま

左調子

も曇りがちなる狂るのあめ
〳〵んと更けたる虫の音よ
まくらよ通ふ狂歌の身よ去
みぐとうたゝ寝の夢よお
どろく胸のうちちさあてかぞ
ゆりやハつのこのね

三下り
四條の橋から大ぎ一つ見ゆ
るゝあれは二軒茶屋の大
かゝ丸山の大さうぢやエ
エイ エ、さうぢやいな
三上り
初手は浮気で逢ひ染て
今ぢや義理でもやめられ

ぬたとへどなたの意見でも
思ひこんだる人ぢやものエエ
私ゝやみれんぢのあるわいな
左、調子
思ぶ狂はあちらむこうんせ
お月さんたまの印見ぢやよ
ゝん氣らゝい

左調子

一髪は月が啼いたのほとゝ
ぎすいつゝかゝらむ短かい夜
にまだ春もやらぬ手まくら
や男心はむごらゝい女心は
さうぢやないけ時逢はね
ばくよゝとぐちなやうだ

左調子

久松よゝ久よヨイ〳〵なぜ
が泣いてゐるわいな
におのれもうちの方さんの娘子
さまをばヤレそゝのゝ嫁入の
じやまをゝをるげなぬのす
なぬのすなさるよきいたへ

二上り

エー　ちょんがいな〳〵　ちょん
が奴は下馬先掛へて殿はお
ん馬でだい傘たて傘大名
毛ふつてふり出す　ナアアレ
ワイサノサ　先の方へ〳〵　ろそん
れは忘

二上り

エー　ちょんがいな〳〵　ちょん
が姿さまはとぼけたばあさ
までやれたちやん袋へ稲の
穂入れて嫁女こちらむけ
ナアホニホガエーそれもさう
かいなそんれわ忘

二上り

エー志ょんがいな〜〜志よん
が紙子は今はやり〜〜かどに
たゝずみ喜三よかはりたな
かり〜〜ひけば破るゝナア あ
みのさをエー手づゝら草
履をエゝそんれわゑ

左衾子

ぶらりっとしてはゐれども瓢
箪はひようげて丸く世間を
渡る身は借りの氣さん
じは用立花のさゝきげん
うちでたの〜〜みそ〜〜て又胸
よはゝやんとオゝエゝくくり

左調子
ぴんとすねてはまた笑ひ顔
若労させたり泣せたり色
の世の中若の世界

左調子
ひぢをまくらまうたて寝を
無理よおこせば大あくび
ハクシヨ　風のとがでもないのいな

おほの〆出よが猪出よぐの弁
鎧一本あり　や何んのこたね

左調子
ひきたてのの茶は碧の色に
似て爐の枝炭や梅ヶ香や
消へぬ松むし一床このざり遅
びつけたる一と手前

左調子

ひがの子のまがらはくづれ
富士びたい三ヶ月なりにべよさ
ーてエ、誰れぢや名さへゆか
りの辨天小僧菊五郎助

左調子

もの言はで泣かぬはたるを笑
ふてか真よ心も晴の狐の草に
宿かる露の身を散らす嵐
の悪ーらず

左調子

もうぷっつりとあきらめて
うわさせまいと思へどもつひ
三味線を手にとれば又も
やお前を思ひ出す

左調子
志ばらくはときよ時節とあ
きらめーやんせ牡丹もこも
着て冬ごもり

左調子
すいたお方ヨ行き逢へで顔
はもみぢのてりづたやタダか
つとーてあこうなる五徳鉄

きうかなたハ箸うで入れぼく
ろきーようせい紙は常のことと
げほうの頭へはーごをかけま
だ其うへヨあーだはいてから
傘さいてゆく犯さはふぢの
高根ヨ森て見たい

左調子
もみぢ〜て昔〜ながらの
小倉山君の声を待つわい
な木でさへ心あらばこそ

一上り
もの思ふ身はうぐひすの岡
近くかはりゆこの〜や玄の君
初音一聲手まくらに

左調子
せかれ〜てくよ〜暮らす
エーたまゝ会るふ狂はせのれ
ては相会ふてはせのれ別れ
ともない明けの鐘

左調子
せい紙書くたび三羽づゝから
すが熊野でゝんだげな

左調子

世辞で丸めて浮氣でこねて
小町のやうなわたくさへひと
夜の嵐よさそはれて散らば
この身は ネー モシ 一休さん

左調子

隅田川渡しもる身も時を忘
てけふ九重の月を見るかな

三下り

すきやちぐみよなんならぎ
らくく仇なるみのゆひ麻の
子あさやすぐくのもえぎの
故帖よかづさもめんはぐよう
なきものとおもれよかくと云
ふてこわらくいおよちぐみ

左調子

すだれおろした船の内顔は
見えねど羽織の紋はたし
かおぼえの三ッ柏よんでち
ごはぐなんとせうあとや先
とよこてろが迷ふエンヽも
ぐれつたい船のうち

左調子

私ヽやお前よ首ッたけ私し
やおおよ首ッたけこていらで
とめまヽよ首ッたけ

二上り

涼みよごんせ両國へ橋間よつ
なぐ屋根舟のすだれの内よ
はさヽ向ひ

東調子

いくらくどいても戸板よ豆よ
いつそあんなな奴死ねばよい

三下り

きりぐすそなたの足はほそ
くて長くてなぜよちつくりま
がつたそれでなければオヤ一寸
はねてとまられぬ

東調子

ぬれつばめ雨のみのわのさくへか
へるいぢとはりとの伊達競べ
うつくして植えくし江戸ざくら
その一とふしの青色をば十寸
見鏡みもくもりなく今よつ
たへん春の山ひこ

三下り

年ゴ一度のおたのゝみそりや
七夕さんの事かいな私ゝやど
うゝしても、こうゝしても毎年逢
わねばならぬぞえ、お半ゝみ
ほんまかへエーうそでなゝ

女調子

今日は私ゝがおごりますや

いっぱりいつものなべ焼うどん

女調子

お江戸をあとゴ次郎吉が
甲州街道を性一人わらぢ
きゃはんゴ三度笠、こひゝ
都は山の蔭ちやつと夕げ
の煙たつ

三下り

氣まぐれのはづんで酒の酔
ひゝ地イッソ酔まゝ曙よアレ
重がとけたぢやないかいな

324
51

昭和四年六月廿七日印刷
昭和四年六月三十日發行

定價金貳圓五拾錢

編者　東京府下大崎町上大崎三十八番地　澤友枝
發行者
印刷者　東京市麻布区狸穴町二百一番地　渡邊金市

發行所　東京府下大崎町上大崎三八（渡邊方）　小唄松葉會

不許複製

終